

メディアセンターの主な出来事（平成 20 年度）

メディアセンター（本部）

1. 学内学術情報のデジタル化と学内外への発信
国立情報学研究所（NII）による次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業 学術機関リポジトリ構築連携支援事業の第 2 期（平成 20～21 年度）委託事業に採択された。『三田学会雑誌』、『慶應医学』、『共立薬科大学雑誌』等合計 7,096 件のメタデータを作成・登録しコンテンツを拡充した。収録誌は 40 誌、収録論文数は 1 万以上となり、アクセス数は月延約 25 万ページ、論文ダウンロード数は月約 7 万件に達している。

利用者への発信のインタフェースとして、平成 19 年度から準備を進めてきたポータルサイトの改訂が完了し、8 月に公開した。また、全塾的に Web でレファレンス質問を受ける「質問のすすめ」を開始し、あわせて全塾共通のレファレンスマークを作成、使用を開始した。

また、慶應義塾創立 150 年記念事業の一つとして、『写真集 慶應義塾 150 年』を平成 20 年 11 月に発行するため、平成 18 年度からメディアセンター所長が同編纂委員会の委員長、メディアセンター本部が同編纂委員会の事務局を担当した。同書を編集するにあたり、関連する写真を塾内外から多く収集し、それらをデジタル化し、5,071 枚による業務用データベースを構築した。

2. 大規模利用者調査の実施

北米で広く実施されている図書館サービス品質評価のための利用者調査アンケート（LibQUAL+）を用い、平成 20 年 10 月 6 日から 11 月 1 日にかけて全塾の塾生、教職員を対象に利用者調査を実施した。電子メールによる依頼送付数 36,548 件に対し有効回答は 5,600 件（16.2%）であった。集計結果は以下を参照。

<http://project.lib.keio.ac.jp/libqual/report.html>

3. 図書予算のあり方についての検討

外国雑誌の電子ジャーナル価格高騰に対処するため、西村担当常任理事を主査とし全学部の委員から成る「電子ジャーナル利用検討委員会」を設置して検討をすすめた。

並行して、2009 年契約に向け大手版元のエルゼビア、シュプリンガー、ワイリーの 3 社とは個別交渉を行い、価格を含む契約内容の一部改善を得た。

4. 次期図書館システム（KOSMOSIII）への移行

平成 20 年 9 月に海外図書館ベンダーのシステム

（ExLibris 社の ALEPH & Primo）に決定した。12 月に次期システム・プロジェクト室を日吉に設置し移行作業を進めている。

5. 薬学メディアセンターの統合

旧共立薬科大学図書館システムをメディアセンター現システムへ移行するための蔵書の書誌・所蔵データ統合を進め 9 割方完了した（平成 21 年度上半期内に終了予定）。

6. 蔵書目録週及事業の継続

三田の旧分類和書（3 年目）4,807 冊、アラビア語 1,540 冊、三田学部図書（4 年目）6,201 冊、信濃町の旧分類 3,500 冊等、計 19,581 冊の週及入力を行った。

7. 人材の国際交流と蔵書データによる国際貢献

平成 20 年 4 月から 1 年間、ハーバード大学イェンチン図書館へ職員 1 名を派遣した。また、トロント大学図書館との交換プログラムにより平成 21 年 2 月から 3 週間トロント大学図書館員 1 名を受け入れた。

三田メディアセンター

1. Google ブック検索プロジェクトへの取り組み

平成 19 年 7 月に立ち上がった Google ブック検索プロジェクトについて、同年 9 月より専従チームを組んで進めてきた事前準備作業（データ整備、装備、修理、著作権処理等）が終了した。対象資料の大部分が目録データベース（KOSMOS）に未登録の資料であるため、データ作成に当たってはメディアセンター本部による KOSMOS でのデータ作成と並行して、旧分類図書、和装本にそれぞれに対しメタデータ作成作業班を組んだ。和装本については、デジタル化に当たっての資料の安全性確保を目的に中性紙の帙を全点に取り付けた。事前準備作業の終了を受けて、平成 21 年度より始まる対象資料のデジタル化作業に向けた体制作りを開始した。

2. 貴重書、特殊資料関連の動き

昨年度、重要文化財に指定された「対馬宗家関係資料」について、文化庁と連携しながらの修復作業を 12 月から開始した。平成 20 年度からの 3 カ年計画で、費用総額は 4,800 万円に上る（国から 50%、東京都から 25% の補助を受けている）。

平成 20 年は慶應義塾創立 150 年の年に当たり、年間を通じて様々な催し・イベントが企画された。展覧会など図書館資料を必要とする企画が多く、慶應義塾・福澤諭吉関連の貴重資料を中心に資料の貸出に対応した。特に平成 21 年 1 月からの東京国立博物

館を皮切りに始まった「未来をひらく福澤諭吉展」には、高橋誠一郎浮世絵コレクションから数点の展示をしたほか、ゲーテンベルク聖書を出品した。同聖書の塾外公開は平成12年11月以来9年ぶりのことであった。

特徴あるコレクションの動きとしては、旧改造社資料（山本実彦関連資料）の整理がある。公開・刊行に問題のない資料について、雄松堂アーカイブス（株）でDVD化刊行する方向で刊行委員会を10月に組織し検討を開始している。また、三田文学ライブラリーについては、久保田万太郎資金委員会の委員を中心に検討ワーキンググループを11月に発足させ、同ライブラリーへの収蔵対象者の再検討を開始した。

3. サービス・施設の改善

新館地下1階のAVホールについては、教室におけるAV設備の充実が進んできている現在その使命を終えたと判断し、保存書庫（名称：三田メディアセンター保存庫、収容冊数約2万2千冊）へ機能変更する工事を3月に実施した。今後は、一次資料や慶應義塾関連保存資料のための保存書庫として活用していく。また、同時期に新館地下の3ヵ所の使用禁止となっていた洗面所も倉庫に改修し、保存・保管スペースの確保に努めた。

利用者サービスの面では、新館地下書庫内に丸椅子を30脚新規設置した。ブラウジング中に座って読めるスペースを増やす目的で設置したが、これは平成20年10月に実施した利用者調査(LibQUAL+)で記入のあった利用者からの声に応えたものである。

4. 「慶應義塾図書館和漢貴重書目録」の刊行

貴重書室を中心に教員と連携をしながら10年の歳月をかけて整備してきた同日録を、3月に刊行するに至った。これまで体系だった把握が難しかった慶應義塾図書館の和漢古書を網羅的に調べることができるツールが完成したことにより、研究における利便性の向上が期待される。

5. 目録データ遡及入力継続

毎年継続中の目録データ遡及入力事業については、経済学部洋書の入力終了し、法学部洋書の入力を開始した。また文学部和書、個人文庫の一部および特殊言語の書誌作成を行った。平成20年度の遡及入力冊数は約2万7千冊に達した。緊縮財政下においては、大規模な遡及入力事業の実施は難しいものの、毎年途絶えることなく継続していくべき事業と位置づけている。

日吉メディアセンター

1. 学生の利用環境向上

1階インターネットエリアの改装と名称変更を行い、「インターネットエリア（一階ラウンジ）」には、展示用書架、椅子を配置し、パソコンの利用だけでなく、ゆったりと読書に親しめるスペースとした。

2階「グループ学習室」は、一部に間仕切りを設置して半個室化し、パソコンを囲んでグループ討論に利用できるように改装した。また、3階多読書コーナーを拡大し、語学学習コーナーを新設。多読書のほか、語学検定試験関連本も配置した。

2. 情報リテラシープログラム関連

11～12月に教養研究センターと共同し、学習支援活動の一環として学習相談アワーを試行した。レファレンスデスクに大学院生を配置し、学生からのレポートの書き方、テーマの選び方等の相談に応じた。

3. 学生の読書推進

改装した1階ラウンジで「2007年度貸出ランキング」(利用10回以上)、「先生のおススメ本」の展示を行い、展示してある本は自由に貸出できるようにした。なお、昨年来行っている読書推進活動や、利用環境の整備が功を奏し、館外貸出冊数が過去最高を記録した。貸出冊数は、ここ数年減少傾向にあったが、今年度は173,922冊を記録し、(前年度対比8.5%増)日吉図書館開館以来最高の冊数となった。

4. 蔵書構築

寄贈資料として、「人民日報」1962～1977年までの原紙（製本版）を受け入れた。また、「教養としての漫画」という観点で、漫画を選書対象とすることを決定し、11月から選定・収集を開始した。

5. 協生館図書館

9月1日、協生館4階に「協生館図書館」を開室し、経営管理研究科、システムデザイン・マネジメント研究科、およびメディアデザイン研究科の3研究科の資料を蔵書とし、それぞれの構成員に対するサービス提供を開始した。

6. その他

日吉行事企画委員会(HAPP)の企画として所蔵する16mmフィルムを使用した「映画『幕間』(1924)：無声映画とピアノ・ライブのコラボレーション」と題するイベントを提案、10月に実施し好評を得た。

11月には文学部の徳永聡子助教の企画によるHi-yoshi Research Portfolio (HRP) 2008 (11月14～15日)の展示「西洋初期印刷本の世界—日吉メディアセンター所蔵貴重書展—」に貴重書13点を展覧した。

そのほか、全塾メディアセンター・ポータルとス

タイル的な連携をとりながら日吉図書館のウェブページのリニューアルを行ない、予定通り次年度4月に完成させた。

信濃町メディアセンター

1. 医学部必修授業担当

医学部3年生全員を対象とした「医学文献情報I(基礎)」が履修科目に加わり、4～5月に3グループに分け実施した。信濃町メディアセンター職員が行う授業としては、初の必修科目となる。この他、新規に加わった情報リテラシー教育プログラムに、教員が担当する医学部3年生の自主選択科目「EBM入門」の情報検索部分の受け持ち、高校生のための体験講座でのツアー、看護医療学部2年生の「看護実践ケア」オリエン・ツアー、看護部事例研究・文献検索セミナーがある。小人数を対象とした検索相談もリクエストに応じて定着し、計24回実施した。

2. レファレンスカウンター新体制

閲覧とレファレンスの円滑な連携とシームレスなサービスを実現するために、11月からカウンター体制を変更した。パブリックサービス担当の専任職員4名が交替でレファレンスカウンターに入り、互いのノウハウを共有しながらサービスに当たることにした。

3. 新着図書カバー展示

図書館入口ロビーで、12月に新着図書カバーの展示を始めた。カラフルな表紙カバーで魅力的な空間をつくり、「場」としての図書館を充実させることを目標にしている。

4. 健康情報ひろば開設

患者向けに医療・健康情報を提供する「健康情報ひろば」が、1月5日、病院外来の一角にオープンした。開設にあたっては、医学部および大学病院が共同出資し、信濃町メディアセンターが開設準備委員会事務局を務めた。開設後はメディアセンターが引き続き運営委員会事務局を務め、ボランティアスタッフと協力してサービスに当たっている。

5. 地区契約電子リソースリモートアクセスサービス開始

本部の協力のもと、2月末、全塾で初めて地区契約電子リソースのリモートアクセスサービスを開始した。サービス対象は信濃町所属の学生と常勤教職員。認証にはkeio.jpを用い、ログイン後に専用プロキシサーバを経由して電子リソースにアクセスする仕組みとなっている。

理工学メディアセンター

1. 学習環境整備

学習環境の整備を目的とする3カ年整備計画を立て1カ年目を実行に移した。閲覧室の改修、書架撤去・取付、資料の再配置・除籍などの作業を総合的に検討し、実施した。

創想館地下1階においては、学生の利用度の高い24時間対応の学習エリアである自習室の席を20席増設し、利用者の安全確保のために、グループ学習室およびプレゼンテーションルームに防犯カメラを設置した。

創想館1階では、科学的探究心を養う資料を増やし、表紙を見せて配架した。また家具の配置を変え、快適性を高めた。PC利用席の拡充のため、データベース検索コーナーを本館1階に移設し、AVコーナーの一部は、PCを設置した個人用学習スペースに変更した。

また、本館1階にも資料および電子資源を活用する総合的学習のためのより広い個人用ブースを24席増設した。また学習環境維持のために、当該エリアを私語・携帯の利用を控えてもらう「静かエリア」とした。

2. 蔵書構築

一般図書については、利用者のニーズにより応えることを目的に、当センター蔵書を、海外を含む他大学図書館と比較した。不足している学部生向け・建築関係・生命情報関係の図書の補充を始めた。またレファレンスブックについては、コンパクト化を目的に見直しを行った。秋学期より、利用後棚に戻さずブックトラックにおいてもらう方式での利用調査を開始し、利用が多い資料のデータを収集した。

国際センターからの日本語テキスト・辞書等145冊の寄贈を機に、既にメインコレクションに入っている日本語テキスト類も組み込み、留学生のためのBooks on Japan(日本語テキスト)コーナーを新設した。また、統計類の中で、利用の少ない過去分について別館に移動した。

3. ILL

生協に複写ILL受付業務全体および館内複写機の管理全般を委託し、3月末に作業場所を2階事務室から1階カウンターに移した。

4. 神奈川県内大学図書館相互協力協議会関連

神奈川県内大学図書館相互協力協議会の会長館として、5月22日に総会を、8月6日に実務担当者会を実施した。

5. ウェブページ英語版

ウェブページ英語版の翻訳およびデザイン修正を行った。

湘南藤沢メディアセンター

1. 使いやすい書架の維持

2階に移設して4年を経た語学学習エリアMMLS (Multimedia Multi Lingual Space) のリフレッシュのため、関連語学教員の協力を得て配架資料の見直しを行い、新たに日本語学習用資料を配架した。また、3階一般図書架の狭隘度バランスを平準化するため、夏季休業期間中に社会学(360番台)の図書を中心に書架移動作業を実施した。

2. 利用者サービスの向上

データベース講習会の浸透を目指し、気軽に参加できるよう10分セミナーを今年度から実施した。時間が短いため内容は限られるが、その代わりにレファレンスカウンター利用へとつながる効果が出た。レファレンス広報を図るためには、全塾レファレンスマークを使ったしおりや配布物を作成した。また学生コンサルタントが書いたデータベースのレビュー記事をWEBで公開した。

前年度に試行した「教員のおすすめ本」展示企画を継続し、併せて秋には慶應義塾創立150年に関連した展示を、冬には湘南藤沢学会が発行する雑誌「SFC REVIEW」38号に掲載された各教員の推奨図書に基づく展示を開催した。

3. 施設面の環境向上

2～3階の館内フロアマップを刷新した。前年度に設置した入口総合案内サインとデザインを合わせ、館内サインの視認性が大幅に向上した。また、キャンパス調整費でメディアセンター入口周辺(外側)にテーブルや椅子が設置され、学生や教員の語らいの空間として活用されている。

4. マルチメディア環境の充実

音響スタジオ編集システムを更新し、授業用のPCと同じ音楽編集ソフトを導入、さらにキャンパス内各教室設備の改修にあたり中心的役割を果たし、Blu-rayDisc/DVDプレイヤーとiPod/CDプレイヤーを教室設備に導入した。

AV機器の利用ガイドを学生コンサルタントが作成し、WEBで公開した。

5. 看護医療学図書室

2007年度健康・マネジメント研究科修士論文の引用調査を実施し、調査結果から関連資料を購入した。工事関連では、カウンターの改修工事を行い、

利用者との対応がしやすいようカウンターの高さを変えた。また、業務委託体制を見直し、土曜日に職員が出勤せずに図書室の運営が可能となった。

薬学メディアセンター

1. 薬学メディアセンターの発足

平成20年4月、慶應義塾大学と共立薬科大学の法人合併により共立薬科大学図書館から慶應義塾大学薬学メディアセンター(芝共立薬学図書館)となり、塾内6つ目のメディアセンターとしてスタートを切った。同時にホームページを一新した。

2. システム統合に向けて

共業時代の図書館システム「情報館」から慶應義塾大学図書館システム「KOSMOSII」へのデータ統合は1年後の平成21年4月を目指し、基幹システムのみならず、雑誌システム KOHEI, ILL システム iLiswave 等も含めてすり合わせを行う1年間と位置付けた。

KOSMOSII への統合では、8～9月にかけてほぼすべての蔵書に対して「慶應義塾大学芝共立薬学図書館」のIDバーコードラベルを貼付し、9月下旬より図書書誌・所蔵データ、10月下旬より雑誌書誌・所蔵データ統合作業を開始した。3月末には一部の特殊資料を除きデータ統合が終了し、年度明けのKOSMOS OPAC 公開を待つこととなった。

雑誌システム KOHEI は、メディアセンター本部の全面的支援を受け、次年度からの業務開始に向けた準備が行われた。

3. 閲覧サービスの塾内統一に向けて

4月当初からは利用者サービスに直結するパブリック関連のルール整備として、貸出規則を変更し、他地区メディアセンターとのサービスの均衡を図った。また、塾内ILL料金、早慶ILL、罰則を塾内統一ルール適用とした。

4. 電子資料コンテンツ契約の一本化

全塾あるいは芝共立を含む複数キャンパスで契約している電子ジャーナル、データベースについて、国内商品は平成20年4月、海外商品は平成21年1月の契約更新時に、薬学部も合わせた契約に変更するよう調整を行った結果、ほぼ他地区と同じ電子資料の利用環境が整った。

5. 夜間・土曜開館のカウンター業務委託

夜間および土曜開館時の確実な要員確保のために、6月より学生アルバイト採用を止め、リブレストに業務委託することとした。